

News

vol. 15
2005.JAN

島根県古代文化センター



松江市平所遺跡出土
(重文：見返りの鹿埴輪)



1994年1月21日撮影

大餅行事（オコナイ・伽藍さん）

古伝御当開神事（宍道町・宇由比神社）

この行事は年頭にあたって、地区内の豊作・安全を祈る行事です。『山陰の祭祀伝承』によると、島根県では、寺院や堂で19ヶ所、神社の祭礼として7ヶ所で大餅が奉納されています（した）。一般に、巨大な鏡餅の製作、乱声（大声とともに、参加者が持ち寄った木の棒などで、激しく床などを叩く行為）、牛王法印（災厄除けの護符）の授与などが行われています。奈良時代頃から密教系の寺院で行われ始めた修正会（正月に修める法会・五穀豊穡、国家鎮護を祈る）が民間行事化したものとも、年頭にあたって罪穢れを祓い、豊作を祈願する行事が仏教化したものともいわれています。

松江市秋鹿町では井神地区、本谷地区の人々によって担われており、現在、2月第1日曜日に餅下ろしが行われています。前週の日曜日に餅搗き（4斗餅・直径80cm程度）があり、餅下ろしの前日に、大餅を葛で絡み、夕方、大日堂に大餅を吊り下げます。当

日には、まず「前座敷」として、住職によって願文が読まれますが、その姓はすべて藤原姓。願文の区切りごとに、箸（打つ木）で机を叩きます。行事終了後、餅は切り分けられ、牛王串とともに、各戸に配布されます。

宍道町の宇由比神社では、大餅は6升6合（直径60cm程度）で、餅は両親が健在である男児が担うことになっています。美保関町の千酌では、大餅は作られませんが、供え物としてダイコンなどを供えます。その時、ダイコンを「オオロッパ」、蕪を「コロッポ」、海苔を「ノリヒメ」といい、供える時には、それぞれ「これはオオロッパと申します」と唱えて供えるようです。

皆さんの地域の大餅行事はどのように行われているのでしょうか。

（長州屋）

建築工事着手後1年を迎えた『古代出雲歴史博物館』建設現場

昨年2月から本格的にはじまった建築工事も、本年1月で約1年を迎え、建物躯体の外観も明らかになってきました。1月末の建築工事進捗率は約40%。本年3月には、外構工事にも着手する予定です。



建物全体



資料収蔵庫北側壁面及び躯体屋根鉄骨組

出雲大社の巨大柱、今いずこ

「年末に東京から知り合いが来たけん、大社の柱を見せてやらかと思って案内したけど、もうなかったわ。どげんだったーか」……正月に松江の居酒屋で耳にした会話です。話題の柱は、発掘された出雲大社本殿の柱のこと。径約1.3mの大木（スギ）を3本束ねて1本の柱にするという前例のない巨大柱で、全国的に大きな話題となりました。

この柱は平成12年に土中から取り上げられ、現在保存処理作業が行われています。出土した柱は木材の主成分である樹脂分やセルロース分などが流出・崩壊し、海綿状に変質しています。多量に含まれた水分が形を保っている状態です。自然乾燥させるとひび割れが発生し、激しい収縮を起こして変形します。

こうした木材保存のために考案されたのが、PEG含浸法です。PEG（ポリエチレングリコール）とは水に溶けやすい化学的にも安定した高分子物質で、55度で溶けて液状になるが常温ではロウ状の固形になる性質があります。そこで、木材に含まれている水分をPEGに置き換えることによって形を維持しようとするものです。

巨大柱の場合は、体積が大きく重量も1トン近くあることから特別な含浸槽を作って、約5年間の歳月をかけて処理が行われます。保存処理作業は2週間ごとに重量測定、亀裂・変形の有無等を確認しながら慎重に進められており、順調な進み具合と聞いております。

平成19年春、古代出雲歴史博物館の開館時には出雲大社の御厚意により展示ロビー中央にお目見えすることになります。御期待ください。
(松庵)



定期観察のために含浸槽から引き上げられる巨大柱

「大社まるごと博物館に向けて」

僕はベロタクシー。12月18日に大社町の大社文化プレイスうらら館で行われたワークショップに呼ばれて、はるばる京都からやってきたんだ。みんな、僕のことを知ってる？。ベロはラテン語で自転車のこと、つまり自転車タクシーなのだ。環境に配慮した新しい乗り物として、1997年にベルリンに生まれたんだ。日本では、2002年に京都の街中を走りはじめ、今では、東京青山、喜多方、松本などで活躍し、仲間は50台を越えているんだ。町並みをゆっくり散策しながら、町の空気や季節感を感じるこのことのできる乗り物として、自分でいうのもなんだけど、結構、人気者なんだ。

でも、僕は自転車だから、島根県の決まりでは2人乗りはできないんだ。そこで、僕が大社の町にマッチしているのか、今後、僕を大社の町で走らせる可能性があるかをみんなで確認するために、呼ばれたみたいなんだ。今日のワークショップでは僕の他に、GPS付きの携帯電話を使って、地域の方が地域の情報をインターネット上の地図に登録し、町歩きマップを作る試み、町中に無線LANのネットワークを作って、町歩きをしながら、地域の方が登録した情報をインターネットを通して無料で受信する「無銭LAN」の実験、も同



時に行なわれたようなんだ。つまり、情報のインプットやアウトプットの方法を考え、また町内に数多くある観光スポットをつなぐ道具としての僕の利用可能性を参加者みんなで考えようという試みのようなんだ。

参加者は110名。みんなの声を聞いていると、僕はかなり好意的に受け止められたみたい。えっへん。他の試みを含めて、実現に向けては色々な問題もあるようだけれども、みんなで考えていくことが重要だね。このようなワークショップを引き続いて実施して欲しい、という声も多かったようなんだ。

僕の活躍 (<http://www2.pref.shimane.jp/kodai/about-kodai/bero1.htm>) や町歩きマップの作成の結果 (<http://gis.vertexsys.co.jp/Kodai/Login.asp>) は、インターネットで公開されているみたい。アクセスしてみてね。



海峡ドラマシップ

博物館みてある記⑥

19世紀末ヨーロッパ調の古風なJR門司駅舎や赤煉瓦の商社ビルをはじめ、街のあちこちから大正ロマンの香りが伝わってくる門司港レトロ地区。その一角にあるのが、帆船をイメージした建物の新しいタイプのミュージアム「海峡ドラマシップ」です。(模型が主体で狭義の「博物館」ではありません。)

一階が大正初年の街中を復元した「海峡レトロ通り」。路地で世間話に花を咲かせる等身大の人形が、グレーで無彩色であるにもかかわらず、不思議なリアル感を出しています。また、発祥の地というバナナのたたき売りの啖呵や職人の掛け声など、ともすれば安っぽい演出になりがちな音声効果も、ここでは成功しています。復元された町並みの中に実際にモノを販売しているショップや喫茶店が混在しているのが好評で、特にジブリのキャラクター専門店(宮崎駿のアニメには昭和30年代を彷彿とさせるシーンが多いのですが、なんとこれは現代と大正初年のほぼ中間点に当たります。)が賑わっていました。このあたり、公立博物館でそのままではできない芸当ですが、手法としては大いに学ぶべきところです。

有料ゾーンは、「海峡アトリウム」という“音と光と映像で歴史体験”するホールから始まります。時間がなくて半分ぐら

いしか見ることができませんでしたが、仕掛けが大きく先端技術が駆使されている割にはインパクトがいまひとつ。簾状の立体スクリーンの暗さが気になりました。続く「海峡歴史回廊」も著名な人形美術家10人による源義経、宮本武蔵、高杉晋作など関門海峡ゆかりの人々のかなりデフォルメされた人形の競演ですが、評価が別れるところでは…。その中にあって、出口付近に展示されている豪華客船の断面模型は、船底の石炭室からデッキ上の特等船室まで、船の階層がそのまま貧富の階層になっていたことを雄弁に語る優れた展示です。

最上階が体験型展示「リアルタイム関門海峡」。子供達が一番人気が操船シミュレーションで、眼前の本物の海峡と画面とを相互に見ながら、対岸の下関に向かって実際に船を操縦している感覚が十分に味わえます。海峡で捕れる各種の魚の精巧な模型が展示してありますが、持ち上げて重量を実感できるようになっているのに感心させられます。その名も「さわって魚」。

閉館のチャイムに外へ出ると海峡は鮮やかな夕焼け。岸壁の石畳をかする枯葉の音さえ聞こえる静かさが、却って往時の喧噪を偲ばせることしきりでした。

(センター長 梶谷敦文)

調査研究事業☆最新情報

地域間交渉 調査から



舟形石棺（蓋）の破片

す。過去に発掘されていましたが、今回の調査で、石棺の破片をはじめ、刀・剣や矛、馬具の破片が見つかりました。

北光寺古墳の時期は、古墳時代中期前半代（5世紀前葉～中葉）である可能性が考えられます。北光寺古墳はその立地から、神西湖周辺の出雲平野南西部一帯を勢力基盤とする首長墳と考えられます。今後の調査研究により県内における前方後円墳築造の広がり方をはじめ、当時の古墳社会像に迫れるものと期待しています。

（仁木）

◆北光寺古墳の調査

出雲市南西部の東神西町にある北光寺古墳は、遠くに日本海、眼下には神西湖と出雲平野を臨む眺望の良い丘陵頂部に造られています。県内でも屈指の規模を誇る前方後円墳として古くから知られていました。

今回行った測量・発掘調査の結果、古墳の規模は墳長約64m、後円部径約37mで、県内では5番目の規模となる前方後円墳であることが判明しました。

古墳の表面を飾る葺石が確認されましたが、転落したものがばかりで、本来の位置を保っているものはありませんでした。また、埴輪は見つかっていません。

前方部には石棺を納めた小規模な竪穴式石槨がありま



北光寺古墳前方部の小竪穴式石槨



本居宣長記念館所蔵『出雲国風土記』等写本

近世国学の大成者として知られる本居宣長は、鈴をこよなく愛し、書齋を「鈴屋」と名づけており、それにちなむものだろうと最初は思っていました。しかし、宣長の遺愛の鈴には「駅鈴」もあり、そこに宣長と島根との意外な関わりのお話を記念館の学芸員からお聞きしました。

寛政7年（1795）8月、石見浜田藩第12代藩主松平周防守康定は、伊勢参宮の途中、松阪に泊まり、本居宣長の『源氏物語』講釈を聴講しています。主君の来訪に先立ち、同年5月、同藩儒者で宣長の門人でもある、小篠敏が色紙を添えた駅鈴を持参し、宣長は拝領しています。その駅鈴は、現在、隠岐の島町の玉若酢神社億岐家に伝わる「駅鈴」（重要文化財）を、康定が模鋳させたものであるといひます。

なお、記念館所蔵の宣長書写自筆『出雲国風土記』写本、子の春庭が書写・宣長校合の『出雲風土記抄』写本、孫の内遠書写『出雲国風土記解』写本は調査撮影し、写真資料はセンターで保管しています。（野々村）

風土記調査 研究から

◆本居宣長と出雲・石見・隠岐～風土記調査余話～

『出雲国風土記』写本調査撮影で、三重県松阪市の本居宣長記念館に出かけた折のことです。市内には「鈴」の意匠を用いた標識を多く見かけました（マンホールのフタにも）。

近世国学

の大成者とし



マンホールのふたにかかれた駅鈴（松阪市）
（写真提供：井上治夫氏）

社寺調査 研究から

◆おんし御師がくばったもの

以前10号で、かつての出雲大社には伊勢と同様御師がおり、大社と全国各地の人々との縁を結ぶ、媒介の役割を果たしていたことを紹介しました。古代文化センターでは、北島国造家に属し、幕末の約半世紀、豊前国の半分を檀場（配札区域）としていた高浜（田中）家文書の調査を進めています。

すが、様々なことが明らかになってきました。

御師は様々なものを配りました。大小3種類の玉串、五穀豊穡蝗除けの札、「八雲立つ出雲八重垣…」ではじまる素盞鳴尊の護符のほか、大己貴命・素盞鳴尊・猿田彦・恵比須の神像を描いた掛軸、更には真綿、スルメ、十六島のり、箸、きず薬、元結（髪を束ねる紙ひも）フグの皮(!)などをみやげ物として添えました。ただし相手の身分や、配札の際のお世話になる度合い、お初穂料の金額など様々な条件に応じて、授ける種類の数は異なりました。

去年は、古文書調査にあわせて、荒木屋そば屋（浜村家）に伝わる版木71点を調査し、古文書に記されていたお札や土産物の袋が具体的にどういうものであったのかが判明しました。町内には、この他大社町教育委員会に約150点の版木が所蔵されています。今後さらに多くの版木が発見されるかもしれません。

（岡）



浜村家に伝わる十六島のりとスルメの袋の版木から
摺りだしたもの

古代文化センター テーマ研究より

「藍板締め」の復元研究

古代文化センターでは、古代出雲歴史博物館の企画展示実施に向けた取り組みとして、本年度から「藍板締めの復元研究」と「四隅突出墳丘墓と弥生時代の墓制」という二つのテーマ研究を開始しました。ここでは、「藍板締めの復元研究」についてご紹介します。

島根県が所蔵する藍板締め資料は、布の染色に使用されたもので、文様を彫り込んだ2枚の板の間に布を挟んで強く締めつけて染めるものです。藍を使って染めることから、「藍板締め」と呼んでいます。この技術は、古くは正倉院の御物に確認されていますが、大変珍しい技術であり、不明な部分が多いことから「幻の染色」と呼ばれています。古代文化センターでは残された資料をもとに藍板締めの復元に取り組んでおり、板を再現するための調査や染める布の調査、古文書による製品や材料の調査、藍瓶の検討などを客員研究員とともに進めています。藍板締めは中国でも行われていたことが確認されていることから、こうした復元に向けた調査で得られた成果は、島根のみならず中国やアジアの染織文化研究の一助になるものと考えて取り組んでいます。

（浅沼）



◀藍板締版木「竹に虎」
同 染められた布▶

天倫寺の名宝

—白隠、大雅と
江戸時代の絵師たち—

松江城の南西に位置する天倫寺は、松平直政公ゆかりの名刹です。当館では先年、天倫寺に伝来する多くの書画を調査する機会に恵まれました。調査した書画はおよそ400件にのぼり、名刹としての天倫寺の位置づけをあらためて知ることとなりました。とくに、江戸時代の名僧白隠禅師の遺墨が多数確認されたことは、白隠と天倫寺とのつながりの強さを物語るものとして貴重です。また、わが国を代表する江戸時代の画家、池大雅の作品4点が確認されたことは、出雲に來遊したと伝えられる大雅の足跡をたどるうえで重要な意義をもちます。

本展では、今回の調査で明らかになった天倫寺伝来の書画の中から、白隠や池大雅などの作品、およそ50点をご覧いただきます。

なお、今回の展示をもちまして島根県立博物館は展示活動を終え、平成19年春に開館する島根県立古代出雲歴史博物館にバトンタッチします。昭和34年以来、数々の展覧会を開催して参りましたが、今回が最後の展覧会となります。長年のご愛顧、本当にありがとうございました。そして古代出雲歴史博物館をよろしくお願いいたします。

おもな展示品

■出山釈迦図（白隠筆・江戸時代）

白隠（はくいん）は江戸時代に活躍した禅僧で、臨済宗中興の祖と呼ばれています。その白隠描くところの絵は、従来の絵のルールにのっとりない自由で大胆な作風のもので、ここに描かれたお釈迦さまも修行のためにすっかりやせ細った体つきをしています。その描き方はまったく例の見られないものです。禅宗ではこだわらないことが大切にされるそうですが、白隠の絵はそのことをとことんストレートに表現したものだといえます。天倫寺では白隠に学んだ円桂が住職をしていた関係で、白隠の書画がたくさん伝わっています。

■寿老図（池大雅筆・江戸時代）

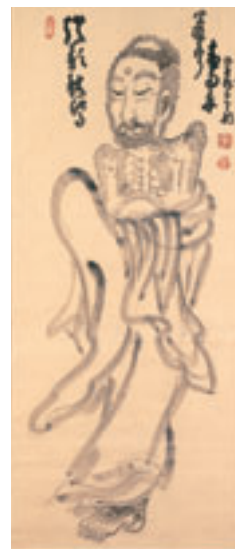
池大雅（いけのたいが）は江戸時代の京都の画家。わが国南画の大成者といわれます。大雅は29歳の時、白隠に会っています。白隠の弟子を頼って出雲地方を旅したといわれ、天倫寺には4点の大雅作品が所蔵されています。画面をはみだす寿老人の描き方は、白隠なみにこだわりがなく自由さが感じられます。

■富士図（狩野永雲筆・江戸時代）

■松平直政像（陶山勝寂筆・明治時代）



寿老図



出山釈迦図

期 間

■平成17年2月1日(火)～3月31日(木)

(前期展：2月1日～27日／後期展：3月1日～31日)

*作品保護の為、会期中で全作品を展示替えいたします。

講座「博物館ゼミナール」

- 演 題 「天倫寺と江戸時代の絵画」
- 講 師 椋木賢治 (島根県立博物館学芸員)
- 日 時 平成17年3月5日(土) 午後2時から
- 料 金 無料
- 場 所 島根県立博物館 (参加者は無料で当館常設展示をご覧ください。)
- 申 込 住所・氏名・電話番号を明記のうえ、当館「博物館ゼミナール係」まで葉書・ファックス・e-mailにてお申し込み下さい。

会 場

■場 所 島根県立博物館 松江市殿町1番地

■入館料 一 般 200円 (160円)
大 学 生 等 100円 (80円)
高校生以下 無料
* () は団体料金 (20名以上)

■時 間 午前9時～午後5時

■電 話 (代表) 0852-22-5750
(学芸課) 0852-22-6282
(ファックス) 0852-22-6728

■休館日 毎週月曜日 (ただし3月21日(月)は開館、
3月22日(火)は休館します。)

編集後記

年が改まってしばらく経ちました。本年もよろしくお願い申し上げます。この頁の「天倫寺の名宝」欄にも記しているように、島根県立博物館の展示機能はこの3月末をもちまして終了いたします。平成12年8月以来、常設展「島根 悠久の歴史と文化」及び数々のスポットコーナー展示を行って参りました。長らくのご愛顧ありがとうございました。県立博物館は展示以外の業務は引き続いて行っていきますし、建設中の島根県立古代出雲歴史博物館の開館に向けての準備も進めていますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。(な)

編集発行 平成17年1月25日

島根県教育庁古代文化センター

〒690-0887 島根県松江市殿町1番地 島根県立博物館内
TEL 0852-22-6727 FAX 0852-22-6728
URL <http://www2.pref.shimane.jp/kodai/>
http://nextthdmuseum.pref.shimane.jp/shimane_2.htm
<http://www.pref.shimane.jp/new/inishie/>
e-mail: kodai@pref.shimane.jp